

風蓮湿原

辻井達一

風蓮湖は北海道東部太平洋面でもっとも大きい湖である。北海道東部には海につづいた潟湖が少なくないが、風蓮湖もその一つで二つの開口部を通じて海水の流入がある。湖岸は海側には低平な砂洲が発達し、砂洲上の低い砂丘にはアカエゾマツ林、エゾマツ、トドマツを含む針広混交林の



発達がみられる。外洋に面する側はハマナス、ハマニンニク、コウボウムギ、シロヨモギなどの砂丘植生、砂洲の内側にはアツケシソウ、ウミミドリ、シバナなどの塩湿地植生がみられる。前者はハマニンニク群集とハマナス群集に、後者はシバナ群集、フトイ群集、ヒメウシオスゲーウミミドリ群落に区分される。

湖の他の三方を囲む丘陵地には、主としてミズナラミヤコザサ群落が発達している。丘陵を刻む浅い谷筋にはヤチダモ、ハンノキ林がみられる。ハンノキ林の林床はヨシ、ミズバショウ、エゾノリュウキンカなどが多い。

これらの谷筋の水を集めていくつかの河川が風蓮湖に流入しており、勾配のきわめて小さいことと、湖の排水不良のために流域に湿原が成立している。

湿原はヤウシユベツ川、風蓮川、ソウサソベツ川、十文字川および別当賀川の各流

域と北側から延びている砂洲の基部、一本木、走古丹の一角にみられる。そのもっとも大きいものは風蓮川沿いのもので一般に風蓮泥炭地あるいは風蓮湿原とよばれる。

風蓮湿原は根室本線厚床駅のほぼ真北約4kmのところにあり、南西から北東にかけて走る二つの低平な丘陵性台地（風蓮および奥行白丘陵）にはさまれた流域湿原で、全体の形は流路に沿う南西―北東に長軸をもつ長楕円ないし長方形に近い。湿原の標高おおむね5m以下で、前にのべたように傾斜はきわめて小さい。

湿原を貫流する風蓮川の川巾は約二〇〜二五mあり、ゆったりと蛇行する典型的な泥炭地の河川で、ウイスキーのような有色透明の豊富な水が流れる。その岸は低い木明瞭な高まりになっているが堤防の役割りを果たすには全く不完全なものである。河口付近に若干の浅い池塘群があるほかは、地形上の変化に乏しい。

泥炭ボーリング調査によれば河口部は泥炭堆積物はないことになっているが、河口部近くにハンノキの沈積した株があるという報告もあり、海岸沈降によって湿潤化の進行したところで、あるいは泥炭が下層に

存在するという可能性もある。

泥炭土層の厚さは二七〇ないし三〇〇cm程度である。この断面には表層から二〇〜四〇cm内に火山灰層が数層存在しており、また一七五cmから二二五cmの間にも一〇〜一五cmの火山灰が一層ある。表層の火山灰は旭岳、雌阿寒岳およびカムイヌプリ岳（摩周）によるものとされている。いま、泥炭の堆積速度を一年一mmとすれば、風蓮泥炭地はだいたい三千年前に発達を開始したといえる。現在より約三千年前の気候は小林（第四紀・地団研・一九六二）の編年による霧ヶ峯の花粉層序にいう寒冷上部トウヒ時代と温暖上部カシ時代の移行期である。しかしこの泥炭地が発達を開始した時代の、この地域の地形がどんな状態だったかはよく知られていない。

風蓮湿原は植生的には基準 5°C にとった温度指数 45°C 以下の根室・風蓮地域に入り、著しいミズゴケのブルトをもつことが特徴である。

湿原のブルト（ミズゴケ堆）は中央部にかけて大きく、よく発達したものは高さ一m、直径5mに達する。形はおおむね円形もしくはそれに近い。周辺部に合つて大

きさは減じ、形もくづれてくる。

も著しい。

(北大農学部附属植物園)

中央部にはミズゴケ上にガンコウラン、イソツツジ、ヒメジャクナゲ、ツルコケモモ、ホロムイツツジなどの低・小灌木類が多い。周辺部にかけてはミズゴケは少なくなりスゲ類(オオカサスゲ、ホロムイスゲ、カワズスゲ、ワタスゲ、サギスゲなど)、ヌマガヤ、イワノガリヤス、ヒメシダ、ナガボノシロワレモコウ、クサレダマ、サワギキョウなどが多くみられる。そして、ほとんどがいわゆるスゲのヤチボウズ状か、あるいはごく小さく、こわれやすいものが多い。丘陵に接する部分と、もつとも川に近い部分、ならびに河口に近い一画にはヨシを林床にもつハンノキ林がみられる。ここにはヨシのほか、イワノガリヤス、ノリウツギ、ホザキシモツケ、ミズバシヨウなどがみられる。もつとも湖に近い部分には、フトイとヨシの群落が広く発達する。その景観はきわめて特異なものがあり、ことに航空機上から見ると前頁の写真のように図形的にも美しい。

風蓮川橋を中心とする地域には一見、ヨシの優占する群落で地床層としてはミズゴケ、ツルコケモモ、エゾイソツツジ、ガンコウランなどをもつものがある。ヨシが高層湿原に挺出している形で、サロベツなどにも若干の例がみられるが、風蓮でもつと